

"If he be Mr. Hyde, I shall be Mr. Seek."  
Robert Louis Stevenson

## 「彼が隠れようというなら、私は見つける鬼になろう」 ロバート・ルイズ・スティーヴンソン

スティーヴンソンの "The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde" (「ジキル博士とハイド氏」) を、2回にわたってとりあげます。この作品は1886年に発表されるとたちまちベスト・セラーになり、作家としての彼の地位は不動のものとなりました。

ジキル博士は、医学博士・法学博士・王立協会員などたくさんの肩書きを持つ著名な学者でした。しかし、彼の心の中では、学問に励んで人のために尽くしたいと願う善の性格と、欲望のおもむくままに振る舞いたいと思う悪の性格がいつも激しく戦っていて、彼を苦しめていました。そこで彼は、この二つの性格を使い分ける方法はないものかと考えた結果、悪の性格を持つ肉体で思うままに行動し、飽きたら善の性格を持つ肉体に戻って正しい道を進むようにすればよいという結論に達したのです。

彼は自宅と地続きの秘密の実験室にこもって、この二つの性格を使い分ける肉体を作る薬の研究に没頭しました。そしてついに、彼の体の中にある悪を分離させ、醜い顔や形をした第二の肉体「ハイド」を作り出す薬と、また「ジキル」に戻る薬の調合に成功しました。しかし、この薬を実際に試すのは命がけです。彼は親友である弁護士のアタソンに、「ヘンリー・ジキルが死亡あるいは3ヶ月以上にわたる失踪もしくは不在の場合は、その所有財産はすべて『友人であり恩人であるエドワード・ハイド』に譲渡すること」という内容の遺言状を託しました。それは、ジキルに何かが起こったとき、ハイドとして生活していくためでした。

この薬を飲み干すと、彼は体じゅうが引き裂かれるような激しい痛みで襲われましたが、苦痛がおさまると肉体は若く軽く小さくなり、強烈な欲望が起って来ました。義務の束縛から逃れ、悪の奴隷となったのです。体が小さくなったのは、彼のそれまでの生涯がおもに善で支えられ、悪の発達を抑えられていたからでした。

それからハイドという男にからむ事件がいろいろ起こります。アタソンは知人から、ある晩いやらしい顔の男が医者を迎えにいった幼い女の子と鉢合わせして乱暴な行爲をしたため、100ポンドの慰謝料を払う羽目になったとき、ハイドと名乗って何とジキル博士のサインの小切手を使った、という話を聞きました。アタソンはジキルの身に危険が迫っていると感じて預った遺言状を金庫から出して読んでみました。しかし、謎は深まるばかりです。そこで、ジキルの仲間の医者で共通の友人であるラニョンを訪ねますが、「ジキルは10年ほど前から精神に異常を来しているらしい」という話が聞けただけで、ハイドについての情報は得られません。ついにアタソンは、それなら自分がかくれんぼ("Hide-and-Seek")の鬼になって正体をつきとめてやろう、と決心して表題の言葉をつぶやくのです。それから仕事の合間に、ハイドが鍵を開けて入ったといわれる裏通りの廃屋のような家の戸口を見張るのを日課とし、ある晩ようやくハイドに出会って短い言葉を交わすことができました。聞いていた通り、その顔は悪魔のようでした。

1年ほど後のある夜、ハイドはステッキで老紳士を殴り殺すという事件を起します。被害者がアタソン宛ての手紙を持っていたため、朝早くアタソンが呼び出されました。被害者は著名な上院議員でした。目撃者の証言でハイドの仕業とわかり、しかも現場には以前アタソンがジキル博士に贈ったステッキの一部が落ちていました。ハイドの家が搜索され、凶器となったステッキの残りの部分や、ハイド名義の銀行の預金通帳などがみつかりました。

その日の午後おそくアタソンはジキル博士を訪ねました。すると召使は裏庭を伝って奥の広い実験室に案内しました。表通りに面したジキル博士の立派な邸宅の奥は、この実験室につながり、さらに実験室の裏口は、裏通りの路地の戸口に続いているのです(ロンドンを舞台とするミステリーによく使われる手です)。ジキルはやつれ果てており、何も語るうともしませんでしたが、「ハイドにはもう二度と会わない」と約束しました。(次回に続く)

